

ワークショップ報告

「世代を超える移住経験と思想の系譜～日本とブラジルの間で～」

日時：2018年1月27日（土）13:30-17:30

場所：上智大学 四谷キャンパス 10号館 301号室

プログラム

司会者

グスターボ・メイレーレス（神田外語大学 非常勤講師）

報告者

「戦後ブラジルにおける日本移民の社会参加と子弟教育の思想」

長村 裕佳子（上智大学大学院 博士後期課程）

「ブラジル日系コミュニティの日本語教育と日本での就労から帰国した日系人の再学習」

中澤 英利子（横浜市立大学大学院 博士後期課程）

「日本における日系ブラジル人の文化変容：外国人集住地域に見られる連帯の可能性」

山本 直子（神奈川工科大学 非常勤講師）

「『多文化共生』とは？：日系ブラジル人からの問いかけ」

伊吹 唯（上智大学大学院 博士後期課程）

コメンテーター

小嶋 茂（JICA 横浜 海外移住資料館 学芸担当）

小川 玲子（千葉大学社会科学研究院 准教授）

ワークショップ全体の概要

1990年の入管法の改正より、ラテンアメリカからの日系人の流入が続いてきた。それを受けて、日本社会は多文化共生や外国人子弟教育の問題に直面している。これらのラテンアメリカから来日する労働者の多くは、戦前戦後の日本からの移民の子弟である二世、三世のUターンである。日本から渡った移民は、移住先国で子弟教育や社会上昇についてコミュニティ内で啓蒙してきたが、そのような先代の移住経験の蓄積はUターンし、日本への適応の問題に直面する日系人の生活において反映されているのだろうか。2008年のリーマンショック後は、日本への定住を選択した者がいた一方、多くが帰国した。これら日系人は日本、ラテンアメリカの間を常に行き来しており、彼らの移動による言語、文化の双方の社会での蓄積はもはや留まることはないのである。

本ワークショップは、このような人々の中で特に日本、ブラジルの間で移動する人々を事例に、時間的、空間的広がりの中で世代を超えて継承される移住経験や思想の系譜を考えることを目的とした。ワークショップの目的を遂行するにあたり、これまでの移民研究の中で不足してきたと考える出移民研究と入移民研究の対話を図った。具体的には、ブラジルでフィールドワークを行いブラジルへ渡った移民を観察する研究者と、日本でフィールドワークを行い日本へ入って来る移民を観察する研究者を報告者、コメンテーターにそろえ、ともに共通のテーマに取り組んだ。

第一報告者の長村は、20世紀初頭からの両国間の人の流れを概観した後、戦後ブラジルの日系団体の理念と日本で子弟教育に取り組む日系団体の理念とを比較し、双方の思想の間につながりがある点を指摘した。第二報告者の中澤は、日本移民が集団移住したサンパウロ州中央西部のマリリア市における日系コミュニティを観察し、日本での出稼ぎから帰国した日系人の間で日本語再学習の動きがあり、それがコミュニティの活性化にもつながっていると示唆した。第三報告者の山本は、日本に暮らす第二世代ブラジル人のアイデンティティを分析し、SNS等のネット空間で彼らのネットワークは保たれ、トランスナショナルなコミュニティとローカルなエスニック・コミュニティへの所属意識が強化されている点を示した。第四報告者の伊吹は、日系人Aさんのライフストーリーを聞き取ることから、語りの中で家族の移住経験とAさん自身の移動の経験の重なりが見られるとし、それがAさんの日本での生活戦略にも影響していることを論じた。

これらの報告に対し、コメンテーターの小嶋茂氏（JICA 横浜 海外移住資料館）からは、日系人の定義、日系人の多様性を考える必要性が問われた。また、ブラジル日系コミュニティの非日系人化の動向にも目を向けることが重要であるとのコメントを頂いた。小川玲子先生（千葉大学社会科学研究院）からは、日系人の経験を捉えるためにはブラジル人以外の日系人の事例をも同時に見ることが必要であること、思想を見るためには集団としてのセルフイメージがどうあったかという視点を持つことが重要であるとの指摘を頂いた。一方、会場からは、今後、日系四世までのビザが発給されることに対してどのような受け入れ態勢を作るべきか、外国人児童の公立学校への不適應はどのように支援できるのか、など支援策に関する具体的な質問が続き、テーマへの関心の高さが伺えた。

本ワークショップは、もともと異なる関心を持つ研究者同士が、それぞれの視点から共通のテーマに取り組むという試みであり、ワークショップまでの打ち合わせの積み重ねにおいてその対話の有効性に気付くことができた。また、当日は学外のコメンテーターをお呼びできたほか、各分野の現場で問題に取り組む方々にお集まりいただき、全体討論ではともに多くの可能性を検討することができた。今回のワークショップを通じて得られた知見を活かし、今後も本テーマに取り組んでいきたい。